

第 88 回 歴史リレー講座「聖地・葛城を歩いて 60 年」 宮城 泰年氏 (R4.1.16)

昔から人々に親しまれ続ける葛城山は『続日本紀』によると、奈良県茅原（現在の御所市）生まれの役行者（634～701 年）が開いたと伝えられています。役行者は次いで大峯修験も開いています。葛城修験が 2020 年に日本遺産に認定されたことは皆様の記憶に新しいでしょう。

1957 年、私は本山修験の総本山聖護院（京都市）に入りました。翌年書庫にあった『葛嶺雜記』という記録本を目にしました。和歌山の友ヶ島から王寺（明神山の麓、亀の瀬）に至るまでの経塚を訪ねた内容に興味を喚起されました。当時葛城に関心を持っていた三井寺の宗務総長などと意思を通じ、経塚調査の心が定まりました。1959 年に調査を開始したのですが、112km の全行程にはまだ認識されていない経塚もありました。経塚は、仏教が廃れた世の中になっても仏法を後世に残そうとの熱い思いで写経を土中に埋めたことが始まりです。特に、里から近い葛城修験は民間信仰の集合地と言えます。理由としてまず、水に始まり（友ヶ島）水に終わる（亀の瀬）ことから、葛城山脈が他界信仰の典型であることが挙げられます。大峯修験で言えば、吉野川でいったん俗世との縁を切り、神の世界で修行を積んだのち、熊野川で生まれ変わると同じものです。また雨乞い行事や弘法水、壺井、二上山の岳のぼりなど水に関わる信仰が篤いこと。葛城山で生きる人々にとって水は神佛の恵みとされます。更に丹生、滝、弁財天、八王子（厄除けの神）などが信仰の対象になっていることも特筆されます。

これまで私は葛城山脈を歩いていく中で、幾度となく神話に触れることがありました。例えば平石峠（第 24 経塚）近くには大峯山に向けて架けるといふ大きな岩があり、一言主神にまつわる「石橋伝説」が残ります。私が歩き始めた頃は植林が国家的に推奨されていたため、葛城山には林道が比較的整備されていました。ところが、その後は開発と過疎化が同時進行し、葛城山は大きく変貌。便利になった半面、人口が町へ流出した結果、山伏道や経塚、寺などが退廃もしくは消滅したものもあります。

そんななか、復興を遂げたのが金剛山の転法輪寺をはじめ、大阪府河内長野市の光滝寺は村人によって見事に再興されています。これは交通の便やいい縁が働いたお陰でしょう。しかし伝承者であるお年寄りに出逢う機会が少なくなり、彼らが口ずさむ伝え歌も滅多に聞けなくなってしまいました。昔は、夕暮れ時にテントの外から声を掛けられ、お風呂や夕食を勧められることもしばしば。悪路を歩き続けた私たちの傷だらけの姿に驚いた村人から手拭いや果物を施してもらったことも忘れられない思い出です。現在は八王子など信仰遺跡の場所すら聞き出すことが難しく、人情や親しみが薄れてきたことも実感します。

さて、最終の第 28 普賢菩薩勧発品経塚ですが、その場所の特定には 3 つの説が存在します。まず、「明神山説」は、『王寺町史』（1969 年）に記載されている明神山鳥居の碑傳や伝承に拠るものです。次の「竜王社説」は江戸時代まで運行していた大阪の剣先舟問屋による竜王社の奉納から生まれた説。最後の「亀の瀬説」は、聖護院が所蔵する天正年間の『峯中記』はじめ幾つかの峯中記にその根拠があります。加えて水から始まって水に終わるといふ他界信仰を考え合わせると、私としては「亀の瀬説」を推す根拠です。

最初の調査では、御所市の村人から「土中からお経の筒が出てきたので埋め戻した」という話を聞いたことがあります。2004 年に同地を訪ねた時には、宅地などに開発されて「信仰の聖地」とはとても呼べない状況でした。経塚はお経の埋納地ですので、昔は五輪塔などを建てたものです。しかし、『葛嶺雜記』に「経塚さえもふたつありとは」と詠まれた岩湧山（第 15 経塚）では、物の構成元素（地水火風空）を表わす水輪が失われているという状況がありました。その一方で、神福寺跡（第 2 経塚）は 1960 年の調査では藪の中に隠れていましたが、現在は整備され訪ねやすくなっています。歴史を振り返れば、明治政府による廃仏毀釈・修験の停止こそ葛城修験にとって最大の危機でした。しかし人々が多くの艱難辛苦を乗り越え信仰を今に伝えていることは誇るべきことであり、これこそが葛城が聖地であり続ける所以です。